

氏 名	じつ かわ とし お 実 川 敏 夫
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 443 号
学位授与の日付	平 成 15 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	メルロ＝ポンティ 超越の根源相

論文調査委員	(主 査) 教 授 伊 藤 邦 武	助教授 福 谷 茂	助教授 杉 村 靖 彦
--------	----------------------	-----------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は20世紀フランスを代表する哲学者モーリス・メルロ＝ポンティの思想の核心を究明しようとしたものである。論者は本論文において、メルロ＝ポンティのテキスト全体の精密な読解を通して、その思想的核心が「超越の根源相」の解明にあると主張する。この主張の提示のために、論者は三つの角度から分析を行う。すなわち、(一)これまでのメルロ＝ポンティにかんする代表的な解釈にたいする徹底的な批判。(二)メルロ＝ポンティ自身による他の哲学者にたいする解釈を通じて浮かび上がってくる、メルロ＝ポンティの哲学的思索の焦点の特定。(三)古典的哲学の代表としてのデカルトとの対比において明らかにされる、メルロ＝ポンティの思索の方法の特徴の明示化。これら三つのテーマのうち、(一)は第1章と第3章で、(二)は第2章で、(三)は第4章でそれぞれ追求される。論者が本論文で試みたのは、これらの三つの角度からの分析によって、「超越の根源相」の解明がこの哲学思想の核心に位置しているものであることを、重層的に明らかにするということである。

各章各節の要旨は以下の通りである。

第1章「メルロ＝ポンティは読まれているか」では、標準的なメルロ＝ポンティ研究および近年の代表的な研究の検討を通して、これまでいかに彼のテキストの真剣な読解がなおざりにされてきたが明らかにされ、その批判を通して論者の見るメルロ＝ポンティの根本問題の所在が示される。第1節「知覚の優位」では、『知覚の現象学』出版の翌年にエミール・ブレイエが加えた批判が取り上げられ、「知覚の優位」がブレイエが理解したようなアイデア論の逆転を意味するものではなく、超越の根源的形態の開示を意味するものであることが明らかにされる。第2節「一種の永遠」では、時間経験の直中において経験される「一種の永遠」ということをめぐって、『知覚の現象学』が「一切のものの経験への内在」を要求するというマディソンの解釈が取り上げられ、これが経験の脱自性、自己超越性というメルロ＝ポンティ思想の核心を完全に抹殺するものであることが詳しく論証される。第3節「実りある矛盾」では、従来の解釈では無視されていた「矛盾」という角度から、メルロ＝ポンティにおける超越の意味が特徴づけられる。第4節「存在論的偶然性」では、再びマディソンの解釈が狙上にのせられ、初期のメルロ＝ポンティを古典的形而上学の単なるアンチテーゼと見なすその観点が、後期のメルロ＝ポンティを古典的形而上学への回帰と見誤らせることになっていることが示される。第5節「生きられる独我論」では、現代の代表的研究者バルバラスの解釈が取り上げられ、それが「生きられる独我論」のパラドクスにたいする無理解を示す点で、マディソンやボフレ以来の誤解を継承するものであるとして批判される。

第2章「メルロ＝ポンティ自身はどう読むか」は、メルロ＝ポンティ自身が他の哲学者をどのように読解しているかということ具体的に精査している。第1節「メルロ＝ポンティの読解論」では、メルロ＝ポンティの読解論のキーワードである「思考されないもの(アンパンセ)」という概念が取り上げられ、これが「志向的存在」であること、メルロ＝ポンティにとって読解とは曲解が繰り返しがという二者択一を超えた「創造による適合」であることが論じられる。第2節「アランと幾何学以前」では、メルロ＝ポンティによるアランの言葉の引用の問題点が検討され、根源的超越の場の解明である「系譜学」としての現象学という視点が明らかにされる。第3節「ラシェーズ・レイと『メノンの問い』」では、同じくメルロ

＝ポンティによるラシェーズ・レイ批判の検討を通じて、プラトンの『メノン』のパラドクスが根源的超越の観点から再考され、超越の弁証法的理解の深化が試みられる。第4節「ラヴェルと『表現の問題』」では、メルロ＝ポンティと類似した言葉遣いを用いたラヴェルの表現論を取り上げて、それらの異同によって明らかにされるメルロ＝ポンティの「表現」概念の独創性が指摘される。

第3章「メルロ＝ポンティをどう読むべきか」では、メルロ＝ポンティの前期から後期への「転回」を論じる典拠とされているテキストを取り上げ、その誤読を正す過程を通じて、過去現在の著明な現象学者たちにたいする批判が遂行される。第1節「メルロ＝ポンティの〈自己批判〉」では、遺稿となった研究ノートにおける自己批判的断章が、あくまでも『知覚の現象学』の十全な理解のもとに、先入見なしに読まなければならないことが示される。第2節「現象学の現象学」では、現象学とは「現象学の現象学」への同時的自己超越であることが示されたうえで、現象学とはそれ自体が一個の存在論であって、一般にいわれる「現象学から存在論へ」という移行はありえないことが詳論される。第3節「デュフレンヌによる読解」では、知覚が超越そのものであることを理解しないデュフレンヌが、メルロ＝ポンティに一元論的な〈自然〉の哲学を見出していることが批判される。第4節「マリオンによる論及」では、著明なデカルト研究者であるマリオンがメルロ＝ポンティに論及するにさいして、その「黙したコギト」論を曲解しており、その曲解のもとでメルロ＝ポンティがデカルト解釈に援用されるという倒錯が生じていることが指摘される。

第4章「区別か結合か」では、古典哲学の典型としてのデカルト哲学とメルロ＝ポンティ哲学の根本的な比較が試みられる。論者の基本的な観点は、前者が「混同」を戒め「区別」を求める哲学であるのに対して、後者は「分裂」を戒め「結合」を求める哲学であるということである。第1節「デカルトにおける観想と実践」では、デカルトにおいて観想が知の領域であるのに対して、実践が信の領域とされていることに注目される。第2節「区別による統一」では、この観想と実践の区別の要求が、真理と時間の区別の要求であり、それはとりもなおさず真理の純粋性の要求であることが論じられる。第3節「メルロ＝ポンティと創造的実践」では、メルロ＝ポンティにおいては時間と真理の同一性が主張されており、このことがデカルトの暫定的道徳の格率とは正反対の主張を含意することが指摘される。第4節「超越による結合」では、真理を「超越論的に明晰なこと」としたデカルトとは異なって、メルロ＝ポンティが「真理の系譜学」を掘り起こそうとしたことが指摘され、真理への超越である知覚こそが同時に「真理の起源」であり、超越の運動としての知覚は相矛盾する二つのものの結合であることが示される。第5節「価値論的変革」では、「区別」の立場が現実の彼岸に理想としての価値を措定するものであるのに対して、「結合」の立場では拘束と結合した価値をこそ有意義な価値と見なすものであることが論じられる。本論文の結論は、前者の区別の立場から後者の結合の立場への価値論的変革にメルロ＝ポンティ哲学の真髓があり、これこそが超越概念の根源相の解明を通じた超越概念の変革である、というものである。

論文審査の結果の要旨

モーリス・メルロ＝ポンティは20世紀フランスを代表する哲学者のひとりであり、その哲学思想にかんする研究はこれまでも膨大な数にのぼる。本論文はこれまでの研究の伝統に徹底的な批判をつきつけると同時に、その哲学思想の核心を新たに見出そうとするきわめて野心的な研究である。

論者が批判の俎上にのせるメルロ＝ポンティ研究の伝統とは、初期の代表作『知覚の現象学』出版当時に現れた、エミール・ブレイエ、ジャン・ボーフレ、フェルディナン・アルキエらの解釈から、遺作の『見えるものと見えないもの』出版後現在までに現れたルノー・バルバラス、ジャン＝リュック・マリオンらの新しい解釈までの全体を指すが、論者によればこれらの研究はすべて、現象と存在の対立図式や伝統的デカルト主義に発する「メルロ＝ポンティ以前」の範疇を無理にあてはめることによって、メルロ＝ポンティ哲学における画期的なものを見損なっている。そのために、これまでの研究は、メルロ＝ポンティの哲学が前期から後期へとどう変化したのかという問題意識のもとに、「現象学から存在論へ」とか「身体から肉へ」という標語を用いて、『知覚の現象学』以来メルロ＝ポンティが一貫して追求した主題とは相容れない観点からこの哲学を特徴づけようとしてきたのである。

このようなデカルト主義的観点からする研究に対峙するために、論者がメルロ＝ポンティ解釈の軸に置くのは、「超越の根源相」という観点である。論者によれば、メルロ＝ポンティにおいて決定的に重要な意味をもつ主題は、われわれの具体

的な経験のなかで常に働いている知覚経験そのものに内在する「超越」のモーメントであり、この独創的な超越の概念をもって、従来の理想主義的な超越の思想を克服することこそが、その思想全体を統括する動機であったとされる。そのために、メルロ＝ポンティはニーチェの「真理はヴェールを被ってのみ真理である」という真理観を踏襲し、あらゆる彼岸的な理想への超越を拒否することを標榜する哲学者であった、というのが論者の基本的な主張である。

論者の主張はこのように、メルロ＝ポンティの思想を主として同時代の現象学運動のなかにのみ位置づけるという、これまでのわが国の解釈者の多くが採用した方法とは異なって、デカルトとニーチェという大きな対立軸のもとで理解しようとする、非常に視野の広い大胆なものであるが、この主張のために論者自身が採用した分析の方法は、決して既成の哲学史の了解を無反省的に利用するという粗雑なものではない。論者の方法は、メルロ＝ポンティのテキストをその細部に見られるニュアンスまで見逃さないしかたで徹底的に追跡しつつ、同時にメルロ＝ポンティがその表現論において展開した、「思考されないもの（アンパンセ）」の解明という視点をこの哲学理解自体のために援用するという方法である。その結果、本論文は全体として、具体的には、一方でメルロ＝ポンティの独自の「超越」概念を明らかにすることを目指しつつ、他方で哲学的テキストの「読解」をめぐる現象学的分析の可能性をめぐる考察の遂行という性格をももつようになっている。

本論文は以上のように、伝統にたいするきわめて批判的な態度と、メルロ＝ポンティの哲学の独創性にたいする強い確信に裏打ちされた研究であるが、この独自の観点にもとづく分析によって、実際にメルロ＝ポンティの独創的な側面にはじめて光が当てられたと思われる点も少なくない。その主たる点を列挙すると、次のようなものが挙げられる。

(一) 論者はメルロ＝ポンティ独自の超越概念を析出し、その意義を弁証しようとしているが、その「超越」とは知覚経験における「裂開」を根本特徴とし、「時間と取り組みつつ創造的に永遠なるものを樹立する行為」、「真理を実現させ、新たな意味を誕生させることにおいて、全未来を先取りし全過去を捉え直す行為」とであると規定されている。真理と時間性、知覚と永遠性との結びつきは、メルロ＝ポンティのテキストの重要箇所においてしばしば論及されているが、この点に注目した研究はこれまでほとんど皆無であった。

(二) デカルトのコギトをめぐるメルロ＝ポンティの考察は、一般に『知覚の現象学』における「黙したコギト」の強調から、『見えるものと見えないもの』における相互主観性への転換として理解されるのがふつうである。しかし論者によれば、黙したコギトが言語的表出という媒介なしにはありえないことは、『知覚の現象学』以来のメルロ＝ポンティの一貫した主張であり、コギトにおける沈黙と表現との矛盾的な統一こそが、メルロ＝ポンティのいう「真理の創設」の顕著な具体例に他ならない。この指摘はメルロ＝ポンティのテキスト解釈として重要な指摘であるばかりではなく、コギトをめぐる哲学的議論としても意義深いものである。

(三) 本論文は、テキストを「読むこと」をめぐる考察に多くの頁を割くというという特徴をもっているが、論者によれば「思考されないこと」をめぐるメルロ＝ポンティの読解論は知覚論以外の何ものでもない。論者は読解とは「思考的侵食」あるいは「創造による適合」として、それ自体が超越の問題であると同時に、他の思想家との「身体的共存」という意味をもつと主張する。この主張によってメルロ＝ポンティの読解論は、その思想全体のパースペクティブのなかに明快な位置を与えられるようになっている。

(四) 論者によれば、メルロ＝ポンティのいう「現象学」は、それ自体が存在論であるばかりではなく「真理の系譜学」でもあるとされる。この解釈は、メルロ＝ポンティの思想の歩みを「現象学から存在論へ」と説明するような通俗的理解を無効にするとともに、メルロ＝ポンティの哲学とニーチェの哲学との親近性を浮きばりにする、きわめて斬新な分析である。論者はニーチェとのこの親近性を論証するために、非常に網羅的なテキストの参照を行っており、この主張を説得力のあるものとしている。

以上に見たように、本論文におけるメルロ＝ポンティ哲学の解釈は非常に透徹したものであり、長年にわたってそのテキストに親炙した者のみが示しうる鋭利な洞察に満ちている。あえて不満を記すとすれば、論者はメルロ＝ポンティの思想に発展や変遷を認めることを拒否して、その根本思想の核心を捉えるという視点を堅持しているために、メルロ＝ポンティの哲学のなかにも見られると思われる思想上の逡巡や未決着な点について、さらに踏み込んで指摘することを避けているところであると思われる。しかし、このような不満は、これまでの50年に及ぶメルロ＝ポンティ研究に根本的な異を唱えることを目的とする本論文の主旨からして、ないものねだりといえるかもしれない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年12月13日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。